タゴオルの兒童觀

早稻田大學講師　吉田源次郎

タゴールは自然敎育を尊重して居ります、彼はガンジス河の上流のボルプールに學校を持つて居ります。これは千九百〇七年、彼が隱遁生活に入る時に創設したのですからもう十三四年も經營して來て居ることになります。

ボルプールは綠の丘の上に

在る村落で、ガンジス河の支流に臨み、美しい印度の平原を眺め渡す形勝の地ださうであります。このボルプールの學校には三百人ばかりの生徒があつて、一つの級には十人以上の生徒を集めることは許されて居ません、つまり一人の敎師は十人の生徒を引受けることになつて居るのであります場合によつては一人の敎師が一人の生徒に附きつきりにして居ることもあるのださうであります、而して生徒も敎師も一つの寄宿に起臥して居ります。

敎師は生徒に對して敎へやうと努めずにたゞ友達となることを念として居ります、卽ち注入敎育でなく、兒童の能力を自然に誘發して來やうとするのであります。

ボルプールの學校に於ては

敎師も生徒も朝は四時半に

起床するのであります。而して彼等は宇宙神（ユニバーサル・ゴッド）の讃美歌をうたひながら顏を洗ふのであります、顏を洗つて了ふと彼等は朝の祈りの會を開くのであります。

六時半になると、彼等は極く輕い朝の食事を取ります、彼等は肉を食べず、たゞパンと少量の野

菜とを食べるのみであります。

七時半になりますと學課が始まります。生徒は各自に一枚づゝの筵を提げて、樹の下か涼しい川のほとりに行くのであります、而して一人の敎師を取圍んで生徒達は端坐瞑目するのであります。

彼等の學校には、敎室は元より、敎科書もなければ、ノオト・ブックも鉛筆もありません、歴史地理等すべての學課は直接に暗記させるのであります。尤も物理と化學との實驗室は備へてあるさうであります。

十時半になりますと、全校の生徒は

附近の川や湖に行つて水浴

を行ひます。斯る時、着物や何かは上級生が取り纏めて保監してくれるのであります、斯く水浴等の場合は勿論のこと、一般に上級生は下級生に對して母親の役目を勤めて居ります。

十一時になりますと、朝と同じやうに宇宙神を讃美禮拜し、十一時半になりますと晝食を取るのであります。晝食も亦極く輕いものを少し食べるだけであります。

晝食後は午後二時まで生後の自由研究の時間であります。兒童はこの時圖書館に入つて紙に印刷された文字を見、森や野に行つて動植物に親しむのであります。

二時になりますと又集つて

筵の上の端坐

瞑目を續ける

のであります。斯くて午後四時に至つて學校は全く終るのであります。

四時からは生徒各自が自分の思ふまゝに運動を行ひます。タゴオルは運動家ですから、よく高山を踏破して獵に出掛けるさうであります、斯る時には生徒は炎熱の下に二十哩位、徒歩させられるのださうであります。

ボルプール附近は冬でも耐えられぬ程に寒くは

ないさうであります、それで生徒は年中裸足といふ決めになつて居るさうであります、靴や靴下を用ゐることは許されないのであります。

タゴールの教育はこのやうに一面精神的であると共に一面非常にスパルタ的であります。

之を要するに

タゴオルの教育は自然教育

であります。自然教育と申しますのは、タゴオルに據れば、兒童の心の中にある無限の力と理智の光とを大自然の力と光とに融合一致させやうとするものであります。大自然と融合一致するための手段として、兒童はなるべく、自然即ち森や泉や野や丘と絶えず接近することが必要であります。

兒童の學校は都會の中にあつても差支ない、しかし都會では自然物と接近する機會が尠いから、出來ることなら山のはざま、湖のほとり等、直接に自然の抱擁を受け得られるやうな土地にあつて欲しいとタゴオルは言つて居ります。タゴオルは

一枚の木の葉
一輪の草の花

の中にも、無限な自然界の神秘が動いて居ることを直接兒童の心に經驗させることを努めて居ります、斯る考から彼は林間の學校を奬勵して居るのであります。

ボルプールの學校では夜になると、生徒達は教師を中心として、種々の精神的な談話を交換します、又晴れた夜なぞには一群の生徒達は教師に導かれて戸外に出で、天體鏡を握り締めながら、星の世界との交通に餘念がありません、這麼時には一方寄宿舍の窓からは、たのしげな音樂の聲が漏れて來るのであります。ボルプールの學校は、殊に夜に於て、そのまゝに詩であります。

生徒達は又各自に動植物の世話をして、その生活を知ると同時に種々なる實驗をも行ふのであります。

彼等は自然を通じて、宇宙の精神を見るやうに導かれるのであります。タゴオルは

智識の人を造ることを望んで

では居りません、靈的の人を造ることを望んで居るのであります。

歐羅巴の教育は牢屋のやうな赤煉瓦の中にたてられて居る、歐羅巴の兒童はその本然の性を破壞せられて一種の不具な近代的な器となるべく教へられて居る。彼等は國家の手段として——國を富ますため、兵力を強めるために教育せられて居る乍併教育といふものは國家や民族の道具を造るために行はれるものではない、人間それ自身を完成するために施さるゝのが眞の教育でなければならぬ、兒童の個性に絶對の權威を認めて行ふところの教育が眞の教育である、個我は國家民族を超越した立場に置かれて教育せらるべきである。

靈的な絶對な人間を造る事

が教育の目的でなければならぬ。タゴオルは斯ういふ風に言ふのであります。

先日も横濱の三溪園にタゴオルを訪れた時、國家や政府の話が出ましたが彼は國家や政府は一面から言ふと個我とは何の交渉もないものである、立派な壁が光り輝いて居る時、その上に雲がかゝつても壁は依然としてその價値を失はないのであるといふやうなことを熱心に言つて居りました、彼の兒童に對する考を最もよく現して居るのは

詩集「新月」と戯曲「郵便局」

との二つであります。

彼の見た兒童は、ウオーズウオースやウイリアム・ブレイクに餘程似て居るところがあります、彼は兒童の周圍には絶えず一種の淡い神秘性が漂うて居ると思つて居るのであります。兒童は大人の解することの出來ない未知の世界の言葉を語る

とか兒童の假睡(まどろ)んで居る睫毛には神秘の國のなつかしい影が漂うて居るとかいふやうなことを彼は言つて居ります。

兒童は私達の生れなかつた前の世界の暗示者であり、私達の尋ねやうとして居る未知の世界を語る豫言者である。私達は子供の頑是ない一擧一動又は意味のないやうな

片言の中に無限の神秘の影

の浮んで居るのを見逃してはならない、と斯うタゴオルは言つて居ります。

兒童程自然界の神秘を味つて居る者はありません、この兒童の特權を間違つた敎育は破壞して了ふのであります。敎育は兒童の純な心、眼に見えぬ世界を見て居る心を何處までもはぐくんで行かなければなりません。

彼は又幼兒は人間に愛を敎へんが爲めに造られたものであるといふ風に見て居ります。彼は這麽風に言つて居ります、幼兒は「あらゆる種類の賢い言葉を知つて居る、この世界ではそれらの言葉の意味を了解するものはあまりない」、而かも幼兒が言葉を語らないのには意味がある、それは

母の唇からなつかしい言葉

を直接に敎りたいからである、つまり赤ン坊はいろ〳〵の言葉を知つて居るが母親にバ、とかマ、とか言つて貰ひたいために言葉を語らないのであると彼は言ふのであります

「幼兒は黃金と眞珠とを積み重ねてゐた、けれども彼は乞食のやうにしてこの世界に來た」、彼が假裝して來たのには意味がある、この愛らしい小さな、素裸かな乞食は自分を全く賴りない身だと僞つて、裕かな母の愛をねだるのである、母の心に愛を起させるのである。

「幼兒はちつぽけな新月の國では、すべてのほだしから自由であつた」、彼がその

自由を棄て、
この世界に來

たのには意味がある、それは母の小さな心の隅には限り知られぬ法悅の空地が殘されて居る、而して彼女のなつかしい腕にかゝえられ、抱きしめられるのは、自由そのものよりもずつと〳〵快いことである、それ故彼はわざと自由の國を棄てゝ來たのである。

「幼兒は嘗て泣くといふことを知らなかつた、彼は全き天福の國に住んでゐた」、彼が涙を流すやうになつたのには意味がある、彼は彼の愛くるしい顏のほゝゑみで彼に對する愛顧の心を惹くことが出來る、けれども何ともないことに泣き出す彼の涙は一層いぢらしい母親の愛を惹き起すからである。斯くの如く

タゴオルは兒
童といふもの

を母及び人類一般に愛の心を喚び覺ますべく人界に遣された神の使であるといふやうに見て居るのであります。

タゴオルの學校教育に對する心持は彼の「花の學校」といふ詩によく現されて居ります、

花の學校

暴風雨の雲が大空にどよめき、六月の驟雨が降る時に、
濕つた東の風が竹のなかに風笛を吹きに荒地を越えて進むで來る、
花の群が急に出て來る、誰も何處だか知らない場所から、そしてほしいまゝな宴樂のなかに草の上に踊る、
母ちやん、私はほんとうに想へる、花は地の下の學校に行くんだと
彼等は扉を閉ぢて、彼等の課業を敎つてゐる
そしてもし彼等がまだ時間前に遊びに出て來ようなら、彼等の先生は、隅の方に彼等を立たせる。

雨が降つて來る時に、彼等は休み日を持つのだ。梢の森のなかに一緒に丁々と搏ち合ふ、葉ははげしい風のなかにざわ〳〵と葉摺れする雷雲は巨人の手を拍つ、そして花の子たちは眞紅と黄と白の着物で跳び出して行く。

知つてゐるの、母ちやんは、彼等の家は大空にあることを、あの星があるところに。

母ちやんは彼等がどんなに熱心にそこに行きたいと思つて居るか見れるの？　母ちやんはなぜ彼等がこんなに急いでるか知つてゐて？

無論、私は彼等が彼等の腕を誰にさゝげてゐるかを推し量ることは出來る。彼等は彼等の母ちやんを持たなければならぬ、恰度私が私自身の母ちやんを持つて居るやうに、

タゴオルは硝子窓の中で教へるやうな教育、言ふことを利かぬ兒童を室の隅に立たせるやうな教育を嫌ふのであります。風に吹かるゝ木の葉や花びらのやうに、

兒童の自然性

のまに〳〵教

育は行はるべきであると彼は言ふのであります。

又彼の詩「星學者」の中には次のやうなことが書いてあります。

弟が言ふ、「夕暮になつて眞丸い滿月があのカダムの木の梢の中に絡みついたら誰も月を捉へることは出來ないのかしら」

兄が笑つて言つた、「赤ン坊、お前は世界中で一等馬鹿な子だ、何うして誰にだつて捉へられるものか、あんなに遠いんだもの」

弟が言ふ、「兄さん、お前は何て馬鹿だらう、母ちやんが彼女の窓から覗いて、私達が遊んで居るのを笑つてる時に、お前は母ちやんが遠くはなれて居ると思ふか」

兄が言つた、「お前は間抜な子だ、お前はその月

を捉へるやうな大きな網を何處から持つて來るんだ」

弟が言ふ、「確かにお前はお前の手でもつて捉へることが出來る」

兄が笑つた、而して言つた、「お前は一等馬鹿な子だ、私の知つて居る限りで。若し月がもつと近く寄つて來たら、どんなに大きいか知つてるか」

弟が言ふ、「兄さん、お前の學校では何て馬鹿なことを敎へるのだらう、母ちやんが私達を接吻しやうとうつむいて來る時に彼女の顏がそんなに大きく見えるかい？　大きく見えるかい？　だけど又兄がいふ、「お前は間抜けな子だ」

この詩に現されて居る兄は現代の智識敎育を受けて居る兒童、弟はタゴオルの所謂本然性を傷けられずに敎育されて居る兒童を意味して居るのでありますの（文責在記者）

人形芝居

人形遣ひの木を叩く音がします。芝居の始まることを見物に知らせるのです。幕が上がると舞臺の窓のところへ面白い帽子を冠つた頰の桃色な娘の人形が出て來ます。一幕の初毎に、必ずこの娘の舞踏の眞似があるのです。吾國のことで言へばあれは三番叟にあたるのだらうと思つて見て居りますと、「キヨ、キヨ」と人形の鳴く音がします。

人形を抱いて遊ぶ女の兒の見物なぞはその鳴音を喜ぶことがおびただしい、舞踏の眞似といつても眞に無雜作なものです。その無造作で單純なところが反つて子供の心を樂ませます。（島村藤村「戰爭と巴里」より）